

民話の数々

ここに収録してある民話は、『東金かたりべの会』のみなさんが各地区のお年寄りから話を聞き、「かたりべ 東金の民話 第一集」第十集」にまとめたものから、各地区ごとにいくつか選んでのせてあります。

東金の民話の本は、それ以外にも出版されていて、図書館にもおいてありますので、興味のある人は読んでみてください。

【東金地区】

和泉ヶ池（土肥実さんの話）

和泉どんという、そうとうな豪族ごうぞくがございまして、天明年間てんめいねんかん（一七八一〜一七八八）か何か、すごい早魃かんばつが九十九里一帯を襲おそって…。

たいへんな田んぼを持っているから…、年貢が上がるとか、上がらないかでは、ずいぶん、その和泉どんという家はたいへんなことになるということ、いまの日吉神社に主人が『願がんかけ』をしたそうです。

「もし自分の持っている田んぼに米がみのつて収穫しゅうかくがあれば、自分の一人娘をお宮へさしあげます」

そういう約束の『願がんかけ』をしたんです。

そうしたところが、不思議にも和泉どんの田んぼは、水はないけれども、じわじわとした状態で、米の収穫があつたんだそうです。

東金かたりべの会…東金図書館主催の「かたりべ教室」の参加者が、教室の解散後、結成した会です。「かたりべ東金の民話」という冊子を第七集から作成しています。

豪族…昔、地方にいて、財産と大きな勢力をもっていた一族
早魃…長い間雨が降らないため水が干涸すること
年貢…昔、田畑や土地にかけた税

秋になり、収穫があつて米俵つまれたら、その娘をお宮へ上げることが忘れちゃつたつていうか、まあ、やらなかったらしいですね。

そしたら、その娘が熱病にかかりましてね、苦しんで、医者に見せても治らないと…。

そのうちにのどが渴^{かわ}いたつていうから、水をやっても飲まない。

「どの水がほしい」

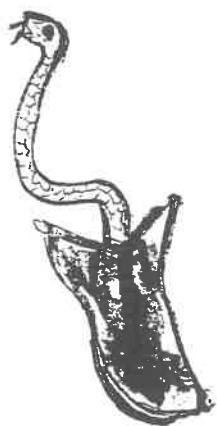
つたら

「和泉^{いずみ}ヶ池^{がけ}」（そのころは『女蛇^{めじや}ヶ池^{がけ}』つていいましたが）

水をどうしても飲みたいということ。まあ、お籠^{かご}に乗せて和泉ヶ池まできたんだそうです。それで、お籠からでて、その水を飲むためにここんだと思つたら、そのまま池へ身を投げちやつたんですね。

あれよあれよというまに、助けなきゃいけないって、みなが大騒ぎをしていたら、池のなかから一匹の白蛇があらわれて、日吉の森の方へきえていっちゃつたつていうふうになっています。

（聞き手…岡部美波子）



家康いえやすお手植てうえのみかん（増田一枝さんの話）

本漸寺ほんぜんじさんと信者のお会式かいしきの行事は、たしか十月十三日だったと思います。お会式になるとうれしくて、のうのうさんの使いでお寺さんにお餅を重箱に入れてもつてゆきました。

坂をのぼった右側にみかんがいっぱいな成りていました。そのみかんは皮が薄いんですよ。お寺のおばさんが帰りに、重箱いっぱいに入れてくれるんです。

そのみかんが、家康のお手植えのみかんで、小さいけど中味がいっぱい入っていて「これを食べると、家康のように頭が良くなるんだってよ」

と、子供のころはずいぶんうれしかったこと覚えています。

「ふくれみかんと言って、皮はよく干して薬研やげんで細かく砕いて、七色とうがらしに作るんだからね、取つていたいよ」

と、のうのうさんがつくつてくれました。

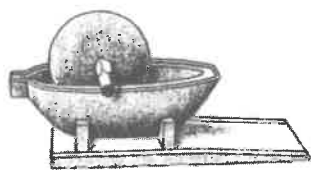
今は、ちがうみかんが植えてあり、記念碑がたてられております。

（聞き手…矢野豊子）

【公平地区】

あぎの移うつった話はなし（土肥実さんの話）

これはおふくろからきいた話ですが、あるところに、顔半分があぎになった娘が



薬研…主に漢方薬を作るとき薬を細かくする器具

いたそうです。

「これじゃ、婿むこさんがきそうもない。あまりかわいそうだ」

つて、親が妙宣寺みょうせんじの仁王様におうさまに、願をかけたそうですよ。

すると、それとぴったり同じあざが、背中に移ったつて。背中にちようどおなじ
大きさですよ。朝起きたら、顔はきれいになってたんだつて。

ある人に、この話をしたら、

「ああ、その人なら、わたし知ってますよ。そのおばあさん、裸になると、背中に
あざがありましたよ。うそじゃないです」
つて。

妙宣寺の仁王様は金剛力士こんこうりきしで、わたしら健康の神ときいています。いぼとりだ
のね。でも、あざまで、あつたところがかわつてしまったつていうのは、珍しい
ですよ。

妙宣寺は家いえの子のこにあります、むかしは尼寺あまでらでした。
華藏けぞう姫伝説ひめでんせつのね。最近でしょう、男のお坊さんがおら
れるのは。

そこには、大塔宮だいとうのみや（護良親王もりながしんのう）が、いつもじぶんの
そばに置いておいたという守仏もあります。お寺にい
くと見せてくれますよ。

（聞き手…中村道子）



大塔宮（護良親王）…オオトウ
ノミヤ（モリヨシシンノウ）
とも読む

中峠のお祖師様の由来（土肥実の話）

あるとき中峠というところに、日蓮上人の座像を背負った千が寺参り（私らただ、千が寺についてますけどね）その千が寺参りの方が来たんだそうです。

で、夕方、土屋さんという方がその千が寺に出会ったもので、

「お坊さん、あんたどこへ行く」

っていったら

「いやあ、日が暮れてしまつてね、いま宿を捜している」
って。

「なら、家に泊まりなさい」

といって、その千が寺を土屋さんのお宅で泊めましてね。翌朝、

「お世話になりました」

ということで、日蓮の座像を背負つて立とうとした。

ところが、大磐石だいばんじやくの石でもしよつたように、小さいそれが、びくとも動かないんだそうですよ。

「こんな不思議なことがあつた。この日蓮様はここにいたいんだろうから、これ置いてく。ひとつ預かってくれ」

って、それで、さつきと行つちやつたんだそうですよ。

んで、土屋さんここでは、困つちやつたけどもしようがない。というわけで、押入れかなんかの中に入れてそのままにしておいたところが、病人は出るわ、災難さいなんは

磐石…大きな岩。バンセキとも読む

出るわ、これはどうしたもんか……。それで、みてもらったら、

「あんたところに、非常にあらたかな物が預かつてある」
つて。

それでおどろいて、その座像ざぞうを、中峠なかびようの寿福寺じゅふくじというお寺へ『お祖師様』としてまつた。だからお寺は、祖師堂になっていて本堂はございません。ただ『お祖師様』というだけのものなんですけどね。

ただ、そのね、千が寺のあいだではね、品川の善慶寺ぜんけいじが火事になって、そんなとき、「日蓮様のことかたしてやる」

つて、かっぱらつて持つてきたつていわれてますね、火事場泥棒かじばどろぼう（笑い）。

その座像はね、日法上人にっぽうしやうにんという日蓮上人の直弟子じきでしが刻きざんだ物で、ひじょうに価値があるんだそうですよ。

だから中峠なかびように行つても、なかなか見せてくんねですよ。あまり宣伝されると、また盗まれるつて。盗んできた物なんですけどね。

あるとき、品川のお寺の人が中身なかみきいて中峠なかびようへきたんだそうですよ、かけ合いに。ところが中峠なかびようでは、もうはあ何年にもなつて祖師堂まで作つちやつてるから渡せない。むこうからは、檀家総代だんかそうだいがみんなきて確かめてね、うちのお寺の日蓮の像だつて。時の代官も役人も困つちやいましてね、

「じゃ、まあ、御神籤おみくじで」

ということになりましたね。御神籤おみくじを作つてみなさんの見ている前でもつて、日蓮上人がここにいたいか、品川のもとの寺にもどりたいか、やらせたんだそうです。

そしたらやつぱり松之郷まつのごう なかびょうの中峠なかつげにいたい、という卦けが出て、それでむこうもあきらめて帰った、大騒ぎだった。そんなふういきいてます。

それから、そのお寺さかえましてね。縁日には、ずいぶん大ぜいお参りがあつたそうですって。

(聞き手…今村玲子)

雲の下の月 (土肥実さんの話)

父親が、

「夕方から雨がふるといったたからよ、イナブラぼちに、ふたして来てくれよ」と、むしろ二、三枚よこしました。

家からよっぽど離れた畑ですが、真っ暗な道をゆくと、むしろの山に雲がもくもく出てきたのに、その雲が、ちぎれたり暗くなったりしている中に、雲の下にぼんやりと、月が出ているんですよ。

「あんだろ、雲の下に月が出るとはおかしいぞ」と。

お月様とにらめっこしたんです。

そのうちに、月が動きだしましてね。

「あれよ、あれよ」と思うまでしたよ。



イナブラ…刈った稲を積み重ねたもの
むしろ…わら・いぐさ・がまなどであんでつくったしき物

たまげちゃって、帰ってから父親に話したら、
「それはな…、タヌキがイナブラぼっちの落花生らつかせいを食いに來たんだよ。タヌキは、
いろんなこととして、化かすからな」と。

それは一度きりでしたけれど。

(聞き手…矢野豊子)

釜かまかぶり日親にっしん(高田七郎さんの話)

北門やごうという屋号の、これは跡取りあととだか次男だか三男だか知らないけれども、その
北門さんの男の方が、小さい時に まあちよつと暴れ坊主かなんかだね。

奉行ぶぎょうっていうんですかね、侍さむらいが、管理している田んぼのでき具合を見て廻まわったそ
うですよ。

その時、その男の子が田んぼへ廻まわっていて、お侍のと
ころへ泥かなんかはねたらしいですね。それで、侍が、
「子供のくせに無礼なやつだ」
と、その子供を追いかけて。

子供は追いかけて…。野口さんの裏の方の金谷かなやと
いうところの中に寺谷てらやというところがありますね。そこ
に、もと、お寺があったですよ。追いかけて、子供



はそこに逃げたらしいですよ。

そうしたところが、そこのお坊さんが、なかなか頓智とんちがよかったですからね、侍が尋ねてきても、

「そういう子供なんか、うちになんか来ない」
だと。

そうしたらまあ、侍がむつきになって（向きになって）捜してみようかという話になったらしいですけれども。

時おいて、お坊さんはその子供を納所坊主なつしやぼうずにして、それでわからなくしたと。

そうしたところがその子供が（小僧さんが）お寺さんに修行して、日親様という坊さんになったって…。

その時は鎌倉時代かまくらじだいですかね。なんか禅問答ぜんもんどうっていって、全国の坊さんが鎌倉幕府に呼ばれて禅問答をしたっていうですよ。

その時、日親は釜をかぶったとか何とかいってね、「釜かぶり」。それで禅問答に勝った。勝ったというとおかしいですが、えらい成績が良くてほめられたらしいですね。それから「釜かぶり日親」というあだ名がついて。

日親様は知恵のある坊さんだったらしいですね。

「釜かぶり日親」って有名ならしいですよ。

日親様の埋葬されたところはね、昔、東金のちょうちん松というのが瀬尾さんという家の裏にあったですよ。もと、高橋高等学校、今、東金女子校になっているあの裏山のところに、大きな松があったんですよ。私ら子供ん時、その松のすぐそば

頓智…その場、その時にうまく出る考えや知恵

納所坊主…禅宗寺院で金銭や米穀などの出納を行う僧。転じて寺院一般で雑務を行う下級の僧

東金女子校…現在は、千葉学芸高等学校

に、日親様というお墓がたっていたですよ。

(聞き手…今村玲子)

日勇上人と「三隣亡」の屋根替え頓智(根本茂さんの話)

日勇上人が本松寺の住職だったとき、本堂は萱葺きの屋根だったですよ。そのとき、屋根が傷んで、茅屋根が落っこちちゃって、雨漏りがしていた。それで結局、屋根替えを始めたわけですね。施餓鬼の日に、雨でも降られたら、本堂の中にいて、皆んな濡れちゃいますからね。

そうすると、ただ……これは東金市内でも一般的でないかと思えますけれども、旧暦の暦に「三隣亡」という日があるですよ。この「三隣亡」そのことなんです。がね、ここでお話しようと思いますのは。

屋根替えを始めちゃって、お盆の十五日には施餓鬼をやらんけいけないわけですね。ところが、屋根屋さんは、まあ今と違いますからね、その「三隣亡」の日に、屋根にあがって、落ちて死んでも困るし、怪我しても困るので、「三隣亡」の日は休ませて下さいと、御前様に申し入れたですね。ところが、日勇上人は、困っちゃったですね。終らないと大騒ぎですからよ。そこでまあ一計を案じてというか、頓智というんですかね、屋根屋さんに、こういう風に言ってますね。

「屋根屋さん、三隣亡の日は、確かに悪いそうですけれども、一日中悪いのではありませんよ。三隣亡という神様が、私達の頭の上を通るときだけ避ければ大丈夫

施餓鬼…飢えに苦しんで災いをする、鬼や無縁の亡者の霊に飲食を施すこと

です。だから、空を通るときだけ、屋根から降りて来て、静かに休んで、方丈の間ほうじょうで、お茶でもあがって下さいよ。私が合図しますから。それで又、三隣亡様が、

方丈…たたみ四畳半の広さの部屋

本堂の屋根の上を通り過ぎたら、屋根にあがって、仕事をやって下さいよ。」

と、こういう風に言っただけというエピソードがあるんですがね、とかく偉い人には、こういう伝説がつきまとうですよね。

そして、お茶を終わってから、屋根に上がって、やっとお盆に間に合った、と、こういうエピソードが残っているんですよ。

(聞き手…今村玲子)

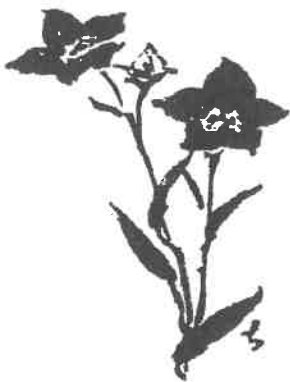
【豊成地区】

十四日信仰じゅうよっかしんこう (布留川貞夫さんの話)

六月一四日に『宮なぎ』つつうのがあんですよ。

将門まさかどが死んだのが天慶三年てんぎやう（九四〇年）の二月一四日、そこから、桔梗ききやうの前の死まえんだのが、その年の六月一四日ですね。だかん、その命日めいにちに合わせたんじゃないでしょうか。それで、『宮なぎ』つつうのを、それなりのつもりでやったんじゃないかと思えますよ。

毎月一四日に、おばあさんたちが太鼓たいこを叩たたいてね。



そんが、戦争中に一五になり、なりよく一日、一五日になったですよ。

でも、いまは、二、三年前から六月の第二日曜になりました。勤めの人が多くなつたもんで、一五が日曜にぶつかんないと集まらないんですよ。

でも、それとは別に、おばあさんどんは、一四日に来て、『おこもり』という素朴な信仰があります。

ふつうは一五日なのに、ここでは一四日にやっているので『十四日信仰』というんでしょね。

(聞き手…高矢圭子)

『よだれがけ』をやっではいけない (布留川貞夫さんの話)

これは、いづくしまじんじや厳島神社の由来記にも書いてあるんですが、こどもが『よだれがけ』をかけてはいけないと、いうですよ。

『よだれがけ』がまわし螻の頭のかっこうに似ているんですよ。

当時は、螻にかまれて死んだひとがいっぱいいるはずですよ。それなのに、なにして言い伝えとして残っているかというと、桔梗の前の死んだこどもは、将門のこどもだったわけですが、そのこどもが螻にかまれて死んだと思うんですよ。なぜつていうと、将門の子孫についての話は、まったく残っていないからですよ。

この郷は、さいと将門に開墾の道具(鉄製のくわ鍬)を貰った。将門の恩恵を忘れないために、郷の言い伝えにしたと思いますよ。

(聞き手…高矢圭子)

開墾…山や野を切り開いて田や畑にすること
恩恵…なさけやめぐみ

まさかど
—将門のたたり—

なりたさん まい
成田山へ参つてはいけない話^{はなし}（布留川貞夫さんの話）

成田山さ参つてはいけないっていうのは、これはひじょうにみんな守っています。これはね、私のおじいさんがいろんな事業に失敗してね、ここんちは貧乏したですけどね……。

ここんちは将門^{まさかど}の恩恵^{おんけい}を受けた人がいるのにもかかわらず、成田山の信者になつちやつてね、講社^{こうしゃ}を作つちやつたですよ。それで三五歳で死んじやつたですよ。

将門の恩恵とはほかでもない、鍬^{くわ}だと思うですよ。ここんちは水難にあつた将門を助けて、鍬をもらい開墾^{かいこん}が進んでひじょうに栄えたという言い伝えがあんですよ。そんどもんで、この辺では、

「それは、将門のたたりだ」

っていうことになってんですよ。

だから、この辺では成田山に絶対お参りしちやいけねえってことになってんです。私が終戦後、兄貴が戦死したもんで、

「百姓になるんだ」

っていったら、近所のおじさんどんが来て、いま生きてたら一〇〇才以上のおじいさんが真顔で私にいうですよ。

「絶対、成田山にお参りしちやいけねえ。おめらえのおじいさんは、将門のおかげ

があつて榮えたにもかかわらず、成田山を信心しちやつて、講社まで作つちやつてのぼせちやつたから、三五才で死んだんだから……」

つて三年も四年も注意してくれてね、親父に聞いたけら親父は笑っていましたけど。その後、七、八年たつてから親父が死ぬですけど、その二、三年前からいろんな話を教えてくれてね、そういうことがあつただそうでした……。

だからうちのほうでは成田山に行きません。

東京の神田明神は、将門が祭神ですよ。二つあるですけど、一つは将門ですよ。だから神田明神の氏子は成田山さ、お参りしません。

(注) 成田山の縁起

将門調伏のために東国公津ヶ原(今の成田市)に地をえらび、ここに不動明王の尊像を安置し三七日間、朝敵降伏の祈禱護摩供養をした。満願の日、天慶三年(九四〇年)二月一四日に将門の乱は治まった。

その後、そこに御堂を建立して尊像を安置した。これが成田山新勝寺の草創である。『成田山教化読本』より)

(聞き手…小見川典子)

宮十文字衆(近藤正さんの話)

酒井氏五代の時代、十六世紀ごろに百年ぐらいつづきましたが、十文字川のまわ



安置…神や仏などを決まった場所へすえてまつること
満願…神仏に祈願した願いがかなうこと

りに武士の集団があつたといひます。

「十文字衆」、あるいは「宮十文字衆」といわれ、地域は、三浦名、高倉、東中
ですか、酒井氏の家臣団がいたそうですよ。

ふだんはお百姓さんをやっているような集団だったのですが、野良に行くのにも
武器を持っていたといひます。槍なんか畔に刺し立てておいて、一の鐘が鳴ると
準備、二の鐘で槍をとって、三の鐘で実際に東金城にかけつけるといひれました。
家にいったん帰らないで、その場からお城にかけつけるということだったのです
ね。

当時はお城といひても天守閣のある立派なものじゃなく、まあ砦といひたもので
すね。

私も前は上宿に住んでましたので、うしろが城山（東金城址）ですから子どもの
ころはしょっちゅう遊びに行ったものです。なにか石垣のかけらでも出て来ないか
と掘ったりしましたが、ぜんぜんなかったすね。

いわゆる堀は空堀で、自然の地形を利用したもので
すね。まあ本丸らしい形はありますね。でもそん
なに広いものじゃなかったすね。

（聞き手…中村 道子）



野良…田や畑のこと

【正気地区】

防海道沼のはなし（佐久間喜一さんの話）

むかあし、檀那寺の坊さんからききましたがね、正気村に東士河というところと、九十九里に粟生というところの地名のあいだに、広い沼がありましてね、元禄一六年（一七〇三）の地震と天明のころ（一七八一—一七八八）の津波で、家が流されたり死者もたくさんでましてね。

そんな禍のないころは、海からの波音もよくきこえる、広い荒れ地だったと年寄りからきいてましたがね。

津波におそわれたとき、そこに大っきな大っきな沼があつて、うっかりひとり歩きができなかったころですよ。波が入りこんで、やっと止まったのが防海道沼というその沼だったんですって。

ずいぶん広くて、御門の妙善寺から九十九里の粟生まで、五キロメートルぐらいあつた沼でしてね。ここの漁師は、

「この沼がなかったら、おらあ…土地流されたり家流されたり、なにもかもなくなっちゃっていただろうよ」と。

それで地元のひと達は、

「大波を防いでくれた沼だからな」

と、防海道沼と呼んだと。

そだけど、御門の妙善寺の坊さんと粟生村の坊さん同志が、沼べりを通って交際をしておったんだって。それで、坊海道沼ともいわれているんだってさ。

(聞き手…矢野豊子)

田畑見の塚たはたみつか (奥田包介さんの話)

広瀬ひろせの村に、享保一七年(一七三二)ごろ建てられたと記されている稻生神社があります。三峰神社みつみねじんじやの分神で勅使ちくしはキツネなんです。

ここに小高い塚(「田畑見の塚」)が建っていて歌が刻まれてありますが、あまり小さくてはつきり読みとれません。

「田畑見の塚」は享保二〇年(一七三五)ごろ、広瀬伝三郎ひろせでんざぶろうさんが一望に見渡す田んぼが、あまりにも芋あしが生い茂り、谷田やつたで水はけもない状態でした。

それで、いろいろ考えて真亀川まがめがわまで水はけを作りましたが、一間半いっけんはん(約二、七メー

トル)で深さがあまり浅かったので失敗しました。苗代なわしろを作ることでもできず、親戚の田を借りて苗代田を作ったのですが、それでも思うようにならなかったのです。

それではと集落しゅうらくの人たちと相談して発案したのが、夏場の八鶴湖を干した客土きやくどをもらいその土で苗代場を作り成功しました。主に田です。畑は少なかったようです。

その様子を残しておこうと、「田畑見の塚」と名前をつけたのではなからうかと

苗代…稲の種をまいて、苗をつくところ

思います。

なお、三峰神社の本社は白里しらさとにあります。

(聞き手…矢野豊子)

【福岡地区】

夜道よみち(関根貞雄さんの話)

ある人が用事があつて福岡村ふくおかむら(いまの東金市)まで使いに行つたときのことです。用事がこみいつて、帰りは日が暮れてしまいました。その晩は闇夜やみよだったし、提灯の用意ありません。「暗くて困つたなあ」と思いながら、家路いえじを急いでいたのです。

すると、なんとなく後からだれかがついて来る気配がします。ふりむくと、女がひとり、追うようについて来るではありませんか。いまごろ、女がひとりで歩いているのはおかしいと思いましたが、さつさと歩き続けました。

しだいに、自分と女との間が近くなったので、おそろおそろ、

「あんか用かい」

とたずねました。すると女は黙っていて、何度たずねても口を聞きません。

男は恐ろしくなつて、家へ駆けこんだそうです。あまりの恐ろしさに息切れがし、ハアハア、どきどき、ただ冷や汗を流すばかり。

その人はそのまま寝込んでしまい、半月ぐらいたって、やっと元通りになったという事です。

それから、だれいうこともなく稲荷神社いなりじんじやの鳥居とりいあたりに女のバケモノが出るとい
ううわさがひろまり、

「夜遅く、あそこは通んねほうがいい」

といつて、人々はそこを避けて遠まわりしたそうです。

(聞き手…矢野豊子)

大蛇だいじゃは食用蛙しょくようがえるだった(菅沢せいさんの話)

時は、昭和の初め、わたしが五才頃の初夏、山の爺じいがそろそろ表へ出てきてもよい頃なのに姿を見せぬ。

「具合でも悪いのか、ちよつと見てくる」

と、祖母は手作りの煮物を持って後田山あとだやまへ出かけたが、ほどなく真つ青な顔で、持っていた煮物の包みを持ったまま帰ってきた。

「おばあちゃん、どうしたん」

と、わたし。

「どうしたもこうしたも大川のへりの葦あしの中から、ごおん、ごおんと恐ろしく大きな声が響いてきた。あれは話に聞いた大蛇のいびきだと思ったら、足がすくんで山道に座り込んで、しばらくたてなかった。あんな恐ろしい目にあったのはこの年に

なつて初めてだ。山の爺どころではない。やつと帰つてきた」と、まだ震えている。

あとでわかつたことだが、ずっと川下の真亀に住んでいる物好きな人が、アメリカから食用蛙のおたまじやくしを輸入して大川に州立てをして飼育していた。ところが、大水が出てそれが囲いから逃げ出して散らばり、蛙になつて後田山の川辺りにすみついた。その初鳴きを、はからずもわたしのおばあちゃんが聞いて腰を抜かしたという嘘のような本当の話。

(聞き手…矢野豊子)

【大和地区】

あかひとづか でんせつ
赤人塚の伝説 (細谷正男さんの話)

私の祖母は、明治六年の酉年生まれで、昭和三八年に九二才の天寿をまっとうして亡くなりました。

私の家では、赤人塚のすぐ近くに田んぼがあり、田植えや稲刈りなどの農作業のおり、お茶飲み話のなかで、この祖母から赤人塚の由来を聞かされました。

私のうちも農家で、田んぼがそこちあるわけですけども、それぞれに、そのうち特有の名前がついているんです。それでこの田んぼは、私のうちでは『赤人』で



山辺赤人…山部赤人とも書く。
奈良時代初期の万葉歌人。柿
本人麻呂とともに歌聖といわ
れた

した。きょうは『赤人』の稲刈りだとか、『赤人』の田植えだとか…。そうすると、その田んぼにいるわけですね。

そこにまつわる話はつぎのようでした。

むかし、むかしのことだが、いま赤人塚のあるところに家があつて、そこで生まれた子どもが、神がかりのように頭が良かった。おとなもかなわないことばで、いろいろのことを歌によんだ。

あるとき、〈かきのひと〉という偉いひと——かきのもとひとまる柿本人麻呂のことと思われませんが、この土地を訪れたとき、この子の頭の良さに感じ、

「りつぱに育てるので私に預けてください」

と申し入れた。それで両親が納得して預けたそうなの。

それからいく年か過ぎたあるとき、その子はりつぱに出世し、その名も山辺赤人となつてわが家に帰った。生まれ故郷のしるしにと、道中使つてきた杖を庭さきにさしたところ、その杖から芽をふき大きな木になつた。

それからいまの木が何代目になるのかはわからないけど、この木の先祖は赤人のついできた杖だから、この赤人塚に生えている木には名前が無いんだって。名無しの木みたいですね。

（聞き手…中村道子）

柿本人麻呂…奈良時代初期の万葉歌人。後世、山辺赤人とも歌聖といわれた

鬼蛇おんじやのはなし — 雄蛇おんじやケ池がいけ — (細谷正男さんの話)

この辺はむかし、蛇へびが多かったらしいですが、雄蛇の主っていうのは、やはり伝説の中でたしかにあるようですよ。

日照りが続いて、雄蛇ケ池の水出しますとですね、雄蛇ケ池の蛇の主が、水を惜しんで必ず雨を降らすですね。まあ不思議です、これは。

ですから、

「おんじや水が出るぞお」

というと、雨が降ると。これは、伝説としてはそうとう、信憑性しんぴようせいがあるんじゃないかと思えますがね。

信憑性…信用できる度合い

海の怖さは、漁師が一番よく知っているとおなじで、この池の怖さは、この辺のひとが一番知っているわけですよ。

ですから、私ら子どもんときに、雄蛇ケ池へひとりで行くと、親たちはひじょうに不安になりました、怒られたものですよ。

雄蛇ケ池を七回り半まわつと・・・(私ら子どもんときはですね、おんじや、おんじやといったものですから)

「鬼と蛇が出てけんかやって、勝ったほうに食べられちゃうぞ」
というような話を子どもんときに聞かされて、

「雄蛇ケ池へ行つてはだめだ」

と、教わってきたですね。

そのほかには、雨の日にこの池に来ますとね、

「きりきりばったん、きりきりばったん」

という機^{はた}を織る音が聞こえる、という話がありますね。

また、最近、不思議なことがありました。いまの堤防は、新しく作り直したんですがね、その堤防作る前に、湖水の水をぜんぶきれいに干したことがあるんです。そのときにですね、この池の底から『おおまりこけむし』という日本でも珍しい物体が出て来たわけです。

大きさも、太さも、丸さも、自動車のタイヤぐらい。その中に胡麻粒^{ごまつぶ}ぐらいの『おおまりこけむし』の種が、ポツポツポツポツと入っていたんですね。ちょうど、寒天^{かんてん}を寄せたように、そんなにぐにやぐにやでなく、形そのものが出てたですね。蛇の分身かなんかのような…。

新聞にも出るし、一時だいぶ話題になりましたね。

(聞き手…今村玲子)

蔵王様ざおうさま（御嶽神社みたけじんじや）（奥田包介さんの話）

内養安寺うちようあんじ（大網白里町）と山口（東金市）の共通の鎮守ちんじゆで、蔵王権現ざおうこんげんといい土地の信仰を集めたようです。

一、アカギレの神様

蔵王様は、土地の者から『アカギレの神様』と親しまれ、願掛けしてアカギレが直ると、足袋たびや手袋てぶくろを納めるそうです。

アカギレ…寒さのために、手や足の皮が切れたもの

二、医者いしやがたたない話

山口では、蔵王様のいかりにふれて医者いしやがたたない、という言い伝えがあるんです。

蔵王様は、そもそもお医者様であつたでしょう…。

三、土蔵どぞうを建ててはいけない話

山口では、いくら物持ちであつても土蔵は建てないんですね。土蔵は土でしょう、土蔵は蔵王に通じる…。

土蔵…まわりを土であつくぬりかためた蔵

そういうことが土地のひとつの言い伝えとして、今だに残っています。ですから山口では、みんな土蔵ではなく板蔵ですよね。

（聞き手…小見川典子）

【丘山地区】

キツネの嫁どり（山本栄さんの話）

雄蛇ヶ池おじゃがいけ―。あれはあ、改修されない前の雄蛇ヶ池で、桜がいっぱい植わってあって、素晴らしい雄蛇おじゃの堤つつみでありました。

いまと違って、店の前から見通しがよく、なにもじやまなものはなし、それはもう雄蛇の堤が、よく見えるわけで、直線コースにして、五〇〇メートルぐらいありましたかね。

春から夏にかけた、一番、昼の長い時期であつたと思います。

『キツネの嫁どり』とは、どなたが、つけたかわかりませんが、夕涼みをやっていると、『キツネの嫁どり』が、実演されるわけです。それも、一回や二回じゃなく、毎年、もう何十回、何百回と見せられたもんです。

その『キツネの嫁どり』っていうのは、晩の八時か、八時半ごろであつたでしょう。縁台に、何人が腰掛けて、うちわを使って、雑談しながら涼しんでいると、『キツネの嫁どり』つうのが、始まるわけです。

「いま、始まんぞ」

というと、雄蛇の堤に、ぱっぱっぱっぱと、提灯ちようちんの列が並んだ。と思うと、端から消えていく。また、こっちから提灯が、灯いていく……。

そうしたことが、毎晩のように続くんですからね。春から夏にかけていつ日ぐら

いあったか、そら覚えてません。みんな昼中の仕事の疲れをいやすつていいですね。ほんとうに楽しみにし、喜んだもんですよ。

私が、一五、六才で、兵隊に志願したころは、もちろん、その前からずっとあつて、二七、八才で帰ってきたら、もう、そういうことはなくなっていました。いま、「懐かしいな」と思いますよ。

(聞き手…高矢圭子)



天狗杉^{てんくすぎ}
(鈴木みつさんの話)

むかし、むかし、村はずれの高台に、松崎六郎左エ門さんの屋敷があつて、その角に大っきな、大っきな杉の木があつたんだつてさ。こんもりと茂つていてひと抱えもある。

枝はね、横にひろがつていて、昼間だつて上の方は暗くて見えねえ位で、

「この杉は天狗様でも住んでいったつぺ」

と、村のもんどんは云つてだんだよね。

崇り…ばちがあたること

「この木を伐ると崇りがある」
と、おっかながつていたんだとさ。

木挽き…木材を切ること。または、それを仕事にする人

ところがある時、木挽さんがこの木を伐り倒してしまっただってさ。

ところがね、ある日天狗杉の所を通ったら、木挽さんの住んでいた山小屋の方からうなり声が聞こえたので、あんだろうと思って行つて見ると、木挽さんが藤蔓でふんじばられて、屋根にぶんなげられていたんだって。

たまげた村人は屋根からおろして、藤蔓をといて介抱して、元気になったけど、それから頭がおかしくなっちゃって

「ほうろくや」「ほうろくや」

と、歩き廻つて、とうとう行方不明になつてしまつたそうだ。

村の人は

「これは天狗様が住んでいた木を伐ってしまったので腹を立て、木挽さんをあんな目に合わせたんだと」

と、云い伝えを今でも残して、杉の木のあつた場所を「天狗杉」と伝えているんだって。

山田の字菱田に、今も天狗杉の跡は残っているんだってさ。

(聞き手…矢野豊子)

すみぞ
墨染めの桜（土肥実さんの話）

西行が奥州の藤原の秀衡のところへ、東大寺再建のための寄付金をもらうために、行く途中か帰りのときかわかりませんが、ここを通っていったということです。

山部赤人と小野小町は、上総の生まれだということをきいて、西行は旅に上つて、その途次寄つたときいているですけれども、『墨染めの桜』は、そのとき深草の緋桜の枝を杖にしてきて、まあ、東金へ立ち寄つたときに、『山田村』というのが、自分のふる里と同じ地名だそうで、西行は、不思議だつていうことで…。

貴船神社のところへ、その杖をさして、

「ほんとうに小町、お前が生まれたところなら、おれのついてきた杖に花を咲かせてみる」

といつて

「花でも普通の花ではいけない…。佐藤義清という侍を捨てた、このおれの墨染めの衣のように、黒く咲かせてみる」
つていうことで、

深草の野辺の桜木心あらば

またこの里に墨染めに咲け

という和歌を詠んでいったというふうには、私はきいております。

まあ事実、『墨染めの桜』がそういった類であるかどうかわかりませんし何代目の桜かともわかりません。

西行…鳥羽院に仕えた武士。二十三歳の時出家、多くの歌を残した

「深草の…」…草深い野山の桜よ、人々の願いどおり、この山里に、今年も墨染めの桜を咲かせてくれよ

いまの桜も、散りぎわにちよつと、紫色に変化するということですけども、それがだいたい、『墨染めの桜』の私がきいた話です。

(聞き手…岡部美波子)



【源地区】

大力じいさん (恩房^{おんぼう}むつさんの話)

子供のころから知っている「大力さん」って、屋号の家があるんですが、豊田さんといって、ちよつと名前はわからないんですが。

そりゃあ、力もちのおじいさんだったそうで、そのおじいさんは「しよいばし」というものを使って、米を背中に五俵位、両手に一俵づつ、口に一俵と、えらいもんです。大変な大力さんで名物男であつたんですよ。

わたしの小学校ごろ亡くなりましたが、お墓にまな板位の下駄^{げた}に太い鼻緒^{はなお}がすえてありました。

「でつかい下駄だなあ、はいてんべや」

と、子供ですもの、おもしろがって履いたおぼえがあります。

それと、「杖^{つえ}んぼ」（杖のこと）が丸太の様な太い棒で、十五センチぐらいの杉の木のようにした。

これは、祖父や村の人々に聞いた話ですが、みんなで力くらべをやつて、炭俵^{すみだわら}を千葉^{まで}迄うりにゆくことになりました。

随分^{ずいぶん}道のりはあるんですよ。二十キロメートル位はどうしてもあります。朝べんとうをこしらえて、問屋^{とんや}さんに出かけました。

大力じいさんは、自分の力を自慢して、えらくたくさん背負いこんで出かけていましたね。

みんなは

「軽ばや（荷を軽くして早く）でゆくべや、それがいちばんだよ」と、かついで出かけました。

そのあとに、荷車が出来たんだそうです。

「だいぶ楽になつて来たなあ」

つて、みんなはいつてたものでした。

大力じいさんは、力^{ちから}自慢^{じまん}もあつてたくさん背負つたそうなの。

「じいさん、おらより随分^{ずいぶん}帰りがおそいけど、なかなかもどらないな、ばかみたいだ」村の人達が心配していたら、なんと、途中でダウンして、炭俵を一俵、二俵と道ぶちに置いてしまつて、何回も運んでたつてさ。と、村のはやされ者になつてしまいました。

問屋…品物をつくる人や会社からたくさん買い、それを小売店へ売る、中つぎの店

大力じいさんは、一瞬の力はあつたけど、継続的な力はなかったらしい、村の人達は

「じいさん、急がば廻れだよ、まわり道しても、飽きずに運ぶこつたよ」

この大力じいさんの話は、何べんも、何べんきかされて、語り草となつております。

(聞き手…矢野豊子)



語り草…話のたね、話題

千^{せん}が寺^じさんの御利益^{ごりやく} (恩房^{おんぼう}むつさんの話)

ずっと続けて、皆さんが信仰して来たんでございますよ。そして、何か困ったことがあるとたいてい助かるなんてねえ。まあ、いろいろそういった庶民の、一般の人達の話があるんですよ。

私の隣の家のおじいちゃん、もう亡くなっていますけれども……。

若い頃に、この腕が、肉腫^{にくしゅ}つていうんでしょいか、腕の下の方が、化膿^{かのう}する病氣になつたんだそうです。

で、どこのお医者に行っても、この右手は、切らなくては駄目^{だめ}だと言われたんだそうですよ。

御利益…神仏の靈驗、効能

「でも、農家だから、手だけはひとつ切らないでほしい」

って、おばあちゃんが、先生に言いまして、

「でも、どうしようもなくなったら、その時は諦め^{あきら}ますけど、もう少し待って下さい」
って、先生にお願いしましてね、千が寺さんに「願^{がん}」を掛けたんだそうです。

で、一週間目の夜、明方ですね、おじいちゃんが眼がさめました、と、いつても、まあ、夢うつつで、痛くて寝られないもんで、蒲団^{ふとん}をこうして高くしていましたら、白い着物を着た神様が出てきて、手をさすってくれていたって言うんですね。

それで、眼がさめてみたら、もう、ここんところ、膿^{うみ}が、血膿^{ちうみ}が流れていたって言うんですね。

おばあちゃんは

「ああ！千が寺さんが来てくれたに相違ない」

って言うわけだね。それから、それを拭^ふきまして、千が寺さんに、さっそくお礼に行きまして、おばあちゃんが

「切らないでなんとか直りそうだから、もう少し、見守ってください」

と、いうことで押んで来て、おじいちゃんは、それから膿が出たために、手を切らないで済んだそうですよ。

だから、よく、おばあちゃんがね

「私は、一日と十五日に、お礼はかかさないですよ」

と、いつも、死ぬまでずっと、言い続けておりました。

（聞き手…福田光子）